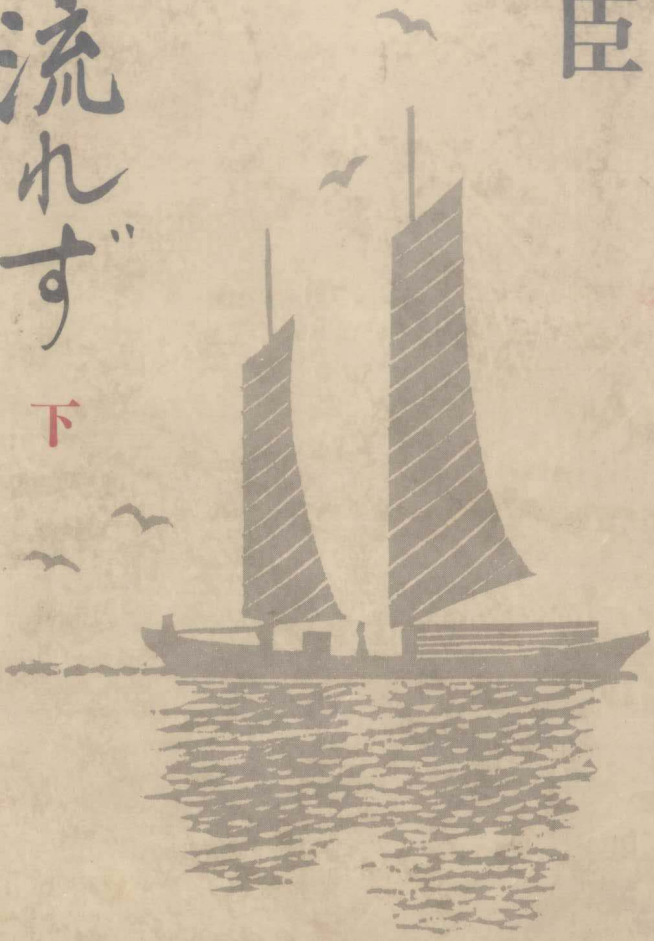
陳舜臣

江は流れず

小説 日清戦争

下



江は流れず

陳舜臣

中央公論社

江は流れず　小説日清戦争　下

定価一二〇〇円

©一九八一

昭和五十六年九月十日初版印刷
昭和五十六年九月二十日初版発行

著者　陳舜臣

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京一-三四
検印廃止

目

次

第二十七章　青年去る　7
第二十八章　足踏み　33
第二十九章　海陸の緒戦　57
第三十章　北上軍　81
第三十一章　平壌を去る　104
第三十二章　煙も見えず　129
第三十三章　次代めざして　147

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三十四章　伐南旗を折る　169
第三十五章　旅順陥つ　192
第三十六章　東学崩壊す　215
第三十七章　使節追放　239
第三十八章　春帆楼　263
第三十九章　李鴻章負傷　287
第四十章　終幕と開始　311

江は流れず

小説　日清戦争

下

第二十七章　青年去る

1

rely（リライ）という英語の動詞は、

――頼みにする。信頼する。

の訳語がつけられている。外交の術語としては、ある勢力をアテにするという意味になる。

――イギリスにリライする。

朝鮮問題について、伊藤首相は基本方針をそう決定した。ロシアの干渉があったのだから、その対策として、イギリスの勢力をアテにするのはとうぜんであろう。

そのような決定をした以上、イギリスが首をかしげるような理由で、清国と戦端をひらくわけにはいかない。清国の朝鮮にたいする宗主権を、イギリスは認めていたばかりか、その強化を希望さえしていたのである。中央の空気に疎い大鳥公使は、「宗主権」問題を開戦のきっかけにしようとして、現地と東京のあいだに軋りが生じた。

日本側に軋りがあったのと同様に、清国内部にもそれがあった。李鴻章派と反李派とのあいだに、朝鮮問題にかんする意見の相違が存在した。

ソウルにいた清国の代表者袁世凱は、両国の軋りに、その独特な政治的嗅覚も、うまく働かなかった。たいていのときなら、核心の部分を嗅ぎつけ、それに対応する姿勢をとることができた。だが、こんどばかりは、そうはいかなかったのである。

袁世凱は自分の政治的嗅覚に自信をもっていた。それが働かないのだから、焦りをかんじたのはとうぜんであろう。かなり図太い神経の持ち主なのに、頭痛をはじめノイローゼの症状があらわれた。

頭が痛いのは、天津にいる李鴻章もおなじであった。

李鴻章はたしかに国政のトップに立っていた。だが、封建独裁政体の下においてである。独裁皇帝の信任を得なければ、なにもできないのはいうまでもない。この場合、独裁皇帝とは西太后のことであった。李鴻章と西太后との関係はうまく行っていた。だから、いままでは、やりやすかったのである。

西太后はことし還暦を迎えようとしている。

皇帝――愛新覚羅載湉（以後は光緒帝と呼ぶ）は四歳で即位して、西太后が長いあいだ摂政として、事実上の女帝として君臨してきた。

ことしは光緒二十年。光緒帝は満でかぞえてもすでに二十三歳である。

（いずれ西太后時代が過ぎ去り、今上陛下の親政時代が来るであろう）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

誰しもそう思っていた。

西太后が若かったころ、大臣要人たちはすべて、彼女の前にひれ伏し、彼女に反抗しようなどとはゆめにも思わなかった。だが、時代はゆるやかに変化しつつあった。

——もう隠居して、たのしむのだ。

西太后自身、だいぶ前からそう言って、げんに隠居所として、頤和園万寿山の造営などがおこなわれたのである。公式には五年前、光緒帝が結婚したとき、大権を返したことになっていた。だが、この五年のあいだ、西太后の影響力が弱まったと思われる事実はない。依然として、西太后時代がつづいている。日本的な表現でいえば「院政」である。

李鴻章は西太后の信任をうけて、国政を運営していた。なまぐさい政界のことだから、反李鴻章派もいたのである。そのような政敵は、しぜんの勢いとして反西太后感情をもっていたが、それは表面に出せないものであった。それだけに、反李感情は一そう増幅されたのである。

光緒帝が成人するにしたがって、「皇帝派」というグループが形成された。

ときの戸部尚書（蔵相に相当）の翁同龢や礼部尚書（文相に相当）の李鴻藻などが皇帝派のおもなメンバーであった。

中国では兄弟はその名の一字が共通するケースが多いので、李鴻藻は李鴻章と関係があるように思われがちだが、まったく無関係である。李鴻藻は河北高陽の人であり、李鴻章は安徽合肥の出身であった。そして李鴻章の兄弟は、鴻ではなく「章」の字を共有している。四川、湖広、両広などの総督を歴任した李瀚章は李鴻章の兄であり、李鶴章はその弟だったのである。

翁同龢は咸豊六年（一八五六）の状元であった。状元というのは、科挙の首席及第者のことで、たいへんな優等生といわねばならない。その学識を買われて、光緒帝の教育掛りを命じられたこともある。光緒帝とそのような個人的な関係があったのだから、彼が皇帝派の中心人物となったのは、とうぜんといえるだろう。

皇帝派のもう一本の柱であった李鴻藻は、翁より四年前の進士であった。この年は、じつは会試（北京における最高試験）のおこなわれる年ではなかったが、「恩科」――人民にたいする特別の恩恵として、それが施行されたのである。李鴻藻は先帝すなわち同治帝の教育掛りをつとめた経歴をもつ。

なおこの甲午の年（一八九四）の状元は、かつて壬午の軍乱のとき、呉長慶の幕僚として朝鮮に出張したことがあり、袁世凱とも交友のあった張謇（ちょうけん）であった。四十二歳という遅れて出た進士だが、成績は首席で、さっそく翰林院修撰となった。彼は翁同龢派にはいり、日清戦争直前に皇帝派の参謀として活躍したのである。

――彼は朝鮮へ行ったこともあり、朝鮮問題にくわしい人物だ。

ということで、時局柄、皇帝派は彼の意見をよくきいた。朝鮮問題について、彼は一貫して強硬派だったのである。

朝鮮問題強硬派に囲まれた皇帝は、年少気鋭の時期でもあったので、はじめから主戦論に傾いていた。

西太后は柔軟派だが、それは彼女が現実の状況をよく把握していたせいではない。自分の還暦

を、平穏にすごしたい、という理由からであった。彼女は、諸外国が日本の朝鮮政策に干渉するようにしむける、李鴻章の方針に賛成したのである。

戦わずに、日本を朝鮮から退けることができれば、それに越したことはない。だが、李鴻章ともあろう人物が、最も効果のあるイギリスではなく、ロシアに干渉を期待したのは大失策というべきであろう。

日本は外交的にイギリスにリライする方針をきめていた。イギリスからの圧力が強まれば、日本はあるいは政策を変更したかもしれない。

主戦派の急先鋒であった陸奥外相でさえ、イギリスの認める宗主権問題を、開戦の口実とすることに反対したのである。

このような情勢を、清国の中枢は察知していなかった。情報の流れるパイプが、どこかで詰まっていたといえよう。

『徳宗実録』によれば、光緒帝が李鴻章にたいして、軍備の実態を調査して報告するように命じたのは、五月二十九日（陽暦七月二日）のことであったという。

――北洋鉄快各艦にして、海戦に備えて堪えうるもの僅か八艘。二百万両乃至三百万両の軍費を支出していただきたい。……

これが李鴻章の覆奏であった。

光緒帝は、この報告に接して、怒りをかくそうともしなかった。――

――汝は長年、海軍を監督し、さきごろの海軍演習の状況報告にも、備えはじゅうぶんである

といったではないか。それなのに、実戦に堪えうるのが僅か八艘とはなにごとか。いったいどれだけの兵を訓練したのだ？

光緒帝のこの諭旨は、きびしい叱責であった。おなじ日、皇帝は劉銘伝に打電して、上京参内するように命じた。

劉銘伝は李鴻章直系の人物である。捻軍鎮圧に功績をあげ、台湾巡撫として台湾の近代化をはかった。清国で鉄道の第一号が敷設されたのは、じつに台湾においてであった。基隆から台北を経て新竹にいたる鉄道が、そのころすでに完成していた。

光緒帝は、このように実務に堪能な人物を起用して、非常時に備えようとしたのである。むろんこれは皇帝一人の考えではなかったであろう。皇帝派の要人たちの進言があったにちがいない。

反李鴻章的な傾向をもつ皇帝派の人たちが、李鴻章直系の劉銘伝の起用を考えたということになる。感情は感情として、国家の将来を託すには、派閥をこえて、有能な人材を適所におくべきである。——皇帝派の人たちもそう考えていたのだ。

このことは、反面、皇帝派にいかに人材がすくなかったかを物語っていた。とくに実務的な才能をもつ人物がいなかった。試験に首席合格したり、文章や弁論にすぐれた人物はいた。いわば理論家ばかりで、実践者がいなかったのが実情であった。

劉銘伝は電報を受取ったが、病気と称して上京しなかった。李鴻章に相談して、参内しなかったのだという噂もあった。しかし、劉銘伝は翌年死亡しているので、このときのことを仮病とするのはあたらない。

皇帝派の狙いは、名ばかりの皇帝親政を、名実ともにそなわったものにするチャンスを得ることにあった。

藩属国である朝鮮に、日本軍が進出している。それを阻止するのは、宗主国としてとうぜんの行動である。

これは正論である。

正論には誰も反対できない。西太后といえども、このタテマエは否定できないであろう。すくなくとも、正面切っての反対はできない。西太后を押しきることは、皇帝親政を強固にするきっかけになるかもしれない。

主戦論にかけた皇帝派の期待は大きかった。そして、李鴻章もそのことを知っていたのである。

「困ったことだ。……」

李鴻章は一日になんども、おなじことばを呟いた。

北洋軍の実力は、彼が一ばんよく知っていた。そして、日本軍の実力も。——

2

七月初旬の天津は、もうだいぶ暑くなっている。——

天津の中クラスの旅館のなかに、二人の青年がいて、窓の外を眺めていた。二人とも暑さはあまり苦にしていない。彼らは暑さに慣れた地方からやって来たのである。——二人の出身地は広東（カントン）であった。

「逸仙よ、いくら外を眺めても、北洋大臣の使者は来ないぞ。……あきらめたほうがよいのではあるまいか」
「献香、われわれの前途は遠い。もっともっと辛抱しなければならないことが、将来、きっとあるだろう。……二週間ぐらいであきらめてはいかん」
「李鴻章を頼ったのは、われわれの誤りだったかもしれんぞ。……朝廷の大官は、われわれの敵であるはずだ」
「究極的には敵であろう。だが、いまはその敵を利用するほか、どんな方法があるというのか？」
「ま、いまのところ、ほかに良い知恵がうかばないが。……だけど、あの羅豊禄という男、ほんとうに、あれを渡したのかな？」
「彼はたしかに渡したと言った」
「礼金を取っているから、渡さないとは言えんだろう」
「いや、渡すのは、そんなに難しいことではないよ。幕僚はいろんな参考資料を、大臣に渡すものだから。……私は渡していると信じるね」
「渡していても、相手がそれを読んでいるかどうか、それが問題だね。……」
「そこなんだよ、献香、あれさえ読んでくれていたら……」
「かならず、李鴻章の使者が来ると、逸仙はそう思うんだね？」
「そうだ。……」
逸仙と呼ばれた青年は、ためらわずにそう答えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com